

特集「色への興味を研究に：研究計画から論文投稿まで」 査読に対応する

The way to sublimate your interest in color to academic research: From designing research to submitting paper

査読でつまづかないための7箇条

Seven things to avoid tripping in peer review

酒井 英樹
Hideki Sakai大阪市立大学
Osaka City University

キーワード：論文執筆, 査読, 抄録

Keywords：write paper, peer review, abstract

色彩学会誌に投稿する論文は、「色彩に関する学術、技術、または芸術の進歩・向上に寄与し、信頼性を有し、独創的で新規なまたは有用な研究結果を含む」(日本色彩学会誌 論文投稿クイックリファレンス¹⁾, 2.2節 論文投稿時の注意点より抜粋) ことが求められます。そして、投稿された論文がこの要件を満たし、掲載に値するかを審査するプロセスが、査読です。ここで、元々、そのような研究結果が含まれていなければ、更なる研究をするのみです。しかし、含まれていても、そのことが査読者に伝わらなければ、論文にはなりません。

本節では、論文に値する研究結果が含まれていることを前提として、そのことを査読者に伝えるための7箇条を紹介します。

【投稿前】

1) 投稿予定の学会誌の最近の論文を読む

新聞や週刊誌などの定期刊行物には、一定の読者層があり、そこに掲載される記事には、刊行物ごとにしらさがあります。よい記事でも、その読者層に相応しくなければ掲載されないでしょう。これは、学術雑誌でも同じです。色彩学会誌の場合、学会会員が主な読者層になるわけですが、どんなに優れた研究論文であっても、読者が興味を示さない分野違いのものは掲載されません。その場合、他の雑誌への投稿を勧められます。このようなミスマッチを起こさないように、投稿予定の雑誌(願わくば、色彩学会の論文誌)の最近2~3年に掲載された論文にザッと目を通し、自分の原稿が、その学会誌の論文として相応しいか確認しましょう。

2) 先行研究の文献調査は網羅的に行う

研究を始めるときにも、ある程度は調べているとは思いますが、先行研究の調査は、研究結果の新規性をアピールするために欠かせません。キーワード検索を

網羅的に行い、類似の先行研究をピックアップした上で、自分の研究結果が、それらとどこが違うのかを、論文の中で説明しましょう。この際、論文を日本語で書くとしても、文献調査は日本語だけでなく、必ず英語でも行うようにしましょう。なお、英文誌に限らず、各国の言語で発表された学術論文は、題目と抄録とは英語でデータベース化されているので、英語で調べれば十分です。(色彩学会誌の論文で、英文抄録(Abstract)が求められるのは、このデータベースへの登録のためです。)

3) 適切な査読者に巡り合う

論文が学会事務局に届くと、内容を編集委員が確認し、その研究テーマに精通した査読者を選定し、査読依頼を行います。ここで、投稿者が注意する点は、編集委員が原稿全文をじっくり読んでくれるだろうと期待しないことです。通常、編集委員が、投稿原稿を隅々まで読むことはなく、主に抄録に基づいてこの作業をおこないます。よって、抄録がいい加減に書かれていると、分野違いの人に査読されることになり、査読に時間がかかったり、正当に評価されることなく不採択となったりする恐れがあります。原稿を書き上げたらそこで安心せず、研究内容を過不足なく適切に要約した抄録を心して作文しましょう。さらに、投稿する際、抄録に加えて、編集委員会宛に、研究結果を説明する文書や査読を希望する分野を書き添えてもよいでしょう。

なお、抄録は、和文、英文とも、本文を書き上げた後に、書くようにしましょう。この順序を守らないと、抄録が本文の内容と一致なくなったり、重要な研究結果が抜け落ちたりする原因となり、混乱を招きます。和文抄録と英文Abstractで異なる結論が書いてあることもしばしば見受けられます。

さらに、2)に関連して、英文Abstractには、たとえ日本語の論文であっても、世界に向けて、研究の優先権を主張するという重要な役割があります。適切な

査読者に巡りあうためにも、優先権の主張のためにも、新規性のある重要な研究結果は漏れなく Abstract に書くようにしましょう。

【投稿直前】

4) 投稿直前に再度、投稿規程を確認する

いよいよ投稿です。図表や式の番号がずれていないか、参考文献が間違っていないかなど、ダブルチェックしましょう。この段階で、論文投稿規程を改めて確認するとよいでしょう。規程違反があると、論文が受理されず、差し戻されます。多くの場合、チェックリスト(日本色彩学会誌 投稿論文チェックリスト)が用意されていますので、それらを利用して指差し確認、声出し確認しましょう。

【投稿後】

5) 査読意見には全て答える

さて、査読結果が返ってきました。見事一発採択なら、めでたしめでたしですが、大抵は、修正(revision)を求められるか、不採択(reject)のどちらかでしょう。不採択となった場合は、その理由が示されますので、至らなかった点を確認した上で、追加の研究を行うなどして、再投稿を目指すか、編集しなおして、別の学会誌への投稿を考えましょう。一方、修正を求められた場合は、しめたものです。これは査読者が「論文を修正すれば、採択(accept)の可能性ある」と判断したということです。期限内(査読結果を受ける際に、修正原稿の提出期限が示される)に修正原稿を投稿しましょう。

ここで、査読意見は、大きく、大幅な修正(major revision)、小幅な修正(minor revision)、コメント(comment)の3つに分類されます。(これらの区別は明確に書かれていないこともあります。その場合は自ら分類して、対応を考えるとよいでしょう。)このうち、大幅な修正、小幅な修正は、査読の要件として、必ず回答する必要があります。1つでも無回答があると、自動的に不採択となります。修正意見に対しては、対応を考えた上で、1つの意見に対して、1つずつ回答文を作成してください。一方、コメントは、必ずしも対応が必要ではありませんが、多くの場合、コメントに沿って修正した方が、論文がよりよくなるものです。こちらも、対応する、しないに関わらず、回答文は作成した方がよいでしょう。

なお、この査読のやりとりは、何度も繰り返してできるものではなく回数制限があります。日本色彩学会論文誌の場合は1回のみです。つまり、1度の修正で、一定の水準に達していると、査読者に判断してもら

必要があります。そこで、論文原稿には、掲載ページ数の関係で書ききれないとしても、回答書には字数制限はありません。1度のやりとりで確実に査読者の理解が得られるように、研究の背景や細かい設定などを、回答書を通して説明するとよいでしょう。

【普段の心構え】

6) 査読を引き受ける

査読を知るには、査読者の立場を経験してみるのが近道です。希望してできるものではありませんが、色彩学会に限らず論文を書いていると、いずれ査読依頼が舞い込むようになります。依頼があれば、またとない機会だと思って、ぜひ引き受けてみましょう。

査読制度(peer review, ピア・レビュー)については、日本学術振興会教材²⁾の「科学研究の質の向上に寄与するために」という項目で、査読者の役割と責任、ピア・レビューの課題などが解説されています。査読を引き受ける際に一読することをお勧めします。

7) 七転び八起きの精神を持つ

査読意見でコテンパンに言われた挙句、不採択となれば、自分の存在自体が否定されたような悲しい気持ちになります。しかし、その苦難を乗り越えてこそ、論文が採択されたときの喜びがあり、それは、何物にも変え難いものです。まともな査読をせず、高額な掲載料を要求することがビジネスモデルとなっている一部のオープンアクセスジャーナルは、いつ閉鎖するか怪しいところですが、査読がしっかりしている日本色彩学会論文誌の学術論文となれば、未来永劫は大袈裟としても、人類の知識として、少なくとも数百年以上は後世に伝わるはずで、その価値があります。一度や二度の失敗で諦めることなく、ぜひチャレンジし続けてください。

人生ちょっとしたことでつまづくものです。ここに記した内容は、いわば“小手先”のテクニックでしかありませんが、みなさんのつまづきを1つでも2つでも減らすことに繋がれば、嬉しく思います。

参考文献

- 1) 日本色彩学会誌 論文投稿クイックリファレンス <https://color-science.jp/gakkaishi/> (参照 2021-11-24)
- 2) 日本学術振興会, 科学の健全な発達のためにー誠実な科学者の心得ー, 日本語版(テキスト版) (2015) <https://www.jsps.go.jp/j-kousei/rinri.html> (参照 2021-11-29)